

に出てきたような短期型のプログラムを全学に展開すること、そしてもう1つが長期型のプログラムを実施することである。キャンパスアジアのSDI-Aプログラムは、サーキット型研究留学を推進することで、例えば1年近く海外に留学していても、それが研究とリンクし様々な研究を推進することができるようなプログラムとして構築していく。デザインの学生だけでなく、他の領域からも社会課題の解決に参加することによって本来の研究を推進することが十分に可能と考えられている。これらの研究成果をまとめることによって、修士・博士の研究成果を得ることになり、学位につながる。

そして、さらにもう1つは、未来創造型のプログラムである。ライフサイエンス+データサイエンス+グローバル+デザインで、未来志向型の創造型人材を育成していく。新しい学習モデルを構築しプログラムとして提供していこうと考えている。これには少し時間がかかるが、ENGINEプランのセカンドステージの大きな目標として掲げプログラムを実施していく予定である。

第6節 海外キャンパスの展開

第1項 シャリテ・ベルリン医科大学



写真1-2-6-1 シャリテ・ベルリン医科大学

(1) シャリテ・ベルリン医科大学

シャリテ・ベルリン医科大学 (Charité-Universitätsmedizin Berlin) (写真1-2-6-1) は、優れた医学教育と研究で知られる世界有数の医科大学・大学病院である。ドイツ・ベルリンに4つのキャンパスと100を超える研究機関を有し、ヨーロッパでも最大規模の医療組織である。1710年に創立され、その後フンボルト大学医学部を経て、2003年、ベルリン自由大学医学部とフンボルト大学医学部が統合されてシャリテ・ベルリン医科大学 (以下「シャリテ」) となった。結核菌やコレラ菌を発見したロベルト・コッホをはじめ、ノーベル賞受賞者など多くの医学史上に名を残す研究者を輩出している。日本とは、明治期に森鷗外や北里柴三郎をはじめとした多くの日本人医学生が留学し近代西洋医学の研鑽を積んだことから、医学分野において活発な学術交流が続けられている。

(2) シャリテにおける千葉大学拠点形成

千葉大学とシャリテとの学術連携は、2008年頃の予防医学センターとシャリテのベルリン公衆衛生大学院 (Berlin School of Public Health) との交流から始まる。2010年には千葉大学とシャリテの間で大学間交流協定が締結され、以降、ワークショップや共同での大学院講義などを通して交流はさらに活発化した。2013年以降は、コロナ禍の時期 (2020-2021) を除いて、毎年テーマを変えて千葉大学とシャリテの医学部および大学院学生、若手研究者のための日独集中講義を開催し、教育プログラムの作成とグローバルに活躍できる人材育成を行っているほか、在ドイツ日本国大使館の支援を得て日独シンポジウムを共催している。

(3) 千葉大学ベルリンキャンパス・ベルリンオフィスの設置

千葉大学とシャリテとの教育、研究交流の活発化に伴い、千葉大学は2015年3月にシャリテのミッテキャンパス内にオフィスを確保し、千葉大学ベルリンキャンパスが設置された。そこには双方向遠隔通信システムが備えられ、これによってドイツで勉学や研究を行いながら、千葉大学ともつながることが可能となった。同年4月には、シャリテ国際課内に千葉大学ベルリンオフィスが設置され、千葉大学雇用の職員が常駐し事務機能の稼働が始まった。上記に伴い、2016年5月に千葉大学、シャリテの両大学長によって新たな交流協定が締結され (写真1-2-6-2)、シャリテのミッテキャンパスで式典が開催された。その際、シャリテのPries学長から、今後、両大学

がさらなる連携を強化していくこと、および将来的に共同大学院の設置まで見据えた協働内容が発表された。

今後も千葉大学ベルリンキャンパスは、千葉大学のヨーロッパにおける拠点として、また、両大学の学術交流の場としてさらなる発展とグローバル化が期待される。

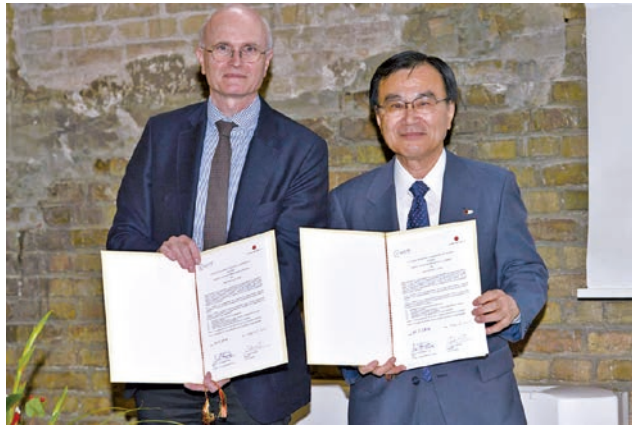


写真1-2-6-2
Axel Pries シャリテ医科大学長と徳久剛史千葉大学長（いずれも当時）

第2項 カリフォルニア大学サンディエゴ校

(1) キャンパス設置の趣旨

感染症、アレルギー、癌の主要発症部位である粘膜組織に存在するユニークな免疫システムである粘膜免疫機構を理解し、制御することで、同免疫が関連する様々な疾患を予防・治療しようとする試みが注目されている。免疫学やアレルギー学において長い伝統を持つ千葉大学にとって、大学・研究機関横断的な国際研究を先導し、1) 学術異分野融合を図りながら新しい学術領域を創成すること、2) 基礎研究からのシーズ創出とその速やかな社会還元のための国際的臨床研究・応用体制を整備すること、3) これら事業を牽引するグローバルな人材育成を目指した国際的研究・教育拠点形成を行うことは重要な使命である。

そこで、2016年、徳久剛史学長と中山俊憲医学研究院長のリーダーシップの下に「粘膜免疫」をキーワードに免疫学、アレルギー学、感染症学、癌生物学、ゲノム医

科学、ワクチン学の知的技術基盤を横断的に融合し世界最先端の国際連携研究を推進するために、カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）と共同教育研究契約を締結し、国際粘膜免疫・アレルギー治療学研究拠点として、Chiba University-UCSD Center for Mucosal Immunology, Allergy and Vaccines（CU-UCSD cMAV）を設置した。この拠点は、UCSD内に設置されたサンディエゴ研究センターと亥鼻キャンパス内に設置された千葉研究センターからなり、臨床研究中核病院である附属病院とは臨床研究の観点で密接に連携する。そして、病原体・アレルゲンの侵入門戸である呼吸器・消化器粘膜を介した認識・排除・共生・寛容などの多様な生物学的応答機構を網羅的・統合的に理解するための新学術領域を創成し、感染症、アレルギー、癌に対する革新的な予防・治療法の創出に向けた先導的基礎・臨床研究、人材育成を国際的に展開する。

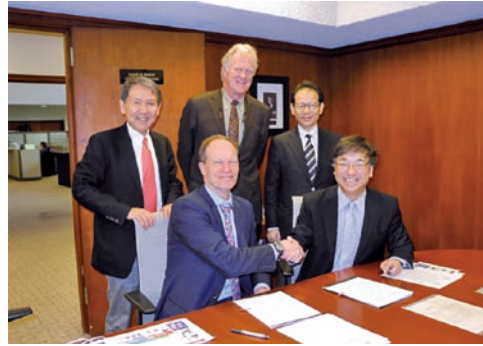


写真1-2-6-3

調印を終えた、UCSD医学部長・副学長（当時のDavid Brenner教授と千葉大学医学研究院長・副学長（当時）の中山俊憲教授（前列））。同席した、清野宏特任教授、Peter Ernst教授、鈴木寛客員教授・文部科学大臣補佐官（後列）。

(2) 活動

a. 組織整備

千葉大学－UCSD合同の教員選考委員会を設置し、クロスアポイントメント教員を選考した。UCSDからはProf. Ernst、ほか計4名が本学の特命教員となり、先導的研究を推進している。UCSDの特命教員は大学院・医学部生のための共同教育・学位審査プログラムにも参加し、本学の大学院教育の充実化を図る取り組みを継続的にサポートしている。本学からも中山俊憲、清野宏、中島裕史がUCSDのAdjunct Professor (Dept. of Medicine及び Dept. of Pediatrics) となり相互連携を推進した。また、UCSDとの国際研究拠点の整備、人材交流に向けた体制整備を進めるため、グローバルプロミネント研究基幹（現：国際高等研究基幹）・研究加速推進担当准教授をUCSDに長期派遣した。

そして2018年に国際粘膜免疫・病態制御学連携講座が設置されたことを皮切りに、現在までに本学の4研究室がサンディエゴ研究センター内に設置されている。UCSDとの国際共同研究を強化した結果、La Jolla Institute for Immunology



写真1-2-6-4
千葉大学医学部の4研究室が入るUCSDのバイオメディカル・リサーチ・ビルディング

(LJI)、Kyowa Kirin Pharmaceutical Research, Inc.、New England Biolabsなど現地の研究所・企業を含む国際研究ネットワークが拡充された。

さらに新型コロナウイルスのパンデミックを踏まえて、SARS-CoV-2の侵入門戸である呼吸器粘膜免疫の理解とそれを応用したワクチン開発に向けての基礎・臨床研究をCU-UCSD cMAVの枠組みを利用して行う体制を構築した。その結果、日本医療研究開発機構

先進的研究開発戦略センター（AMED-SCARDA）の2022（令和4）年度「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業」にシナジー拠点として採択された。これらを駆動力に次世代型粘膜ワクチンに関する基礎研究と臨床開発研究を推進している。

b. 人材育成

CU-UCSD cMAV Development Awardを設置し、若手研究者の研究室整備をサポートした。2023（令和5）年度開設の博士課程ワクチン学コースにおいても、CU-UCSD cMAVとシナジー拠点の研究・教育環境を駆使して、グローバル型ワクチン学研究者の人材育成に中心的役割を果たす。

c. シンポジウム開催

CU-UCSD cMAVの研究活動の情報発信と意見交換の場として、国内外の関連する研究者、異分野の研究者も含めて、定期的にシンポジウムを開催している。

- ・ 第1回CU-UCSD共同シンポジウム（2017年2月21－22日）をUCSD内で開催
- ・ 第2回CU-UCSD共同シンポジウム



写真1-2-6-5
第2回CU-UCSD共同シンポジウム後の記念写真

- ム（2018年3月28-29日）を千葉大学亥鼻キャンパス及びイイノホール（千代田区）で開催
- ・第3回CU－UCSD共同シンポジウム（2019年2月13-15日）をUCSD内で開催

パンデミックにより、対面でのシンポジウム開催は中断しているが、2023年からの再開に向けて準備が始まっている。

d. 国際交流

若手育成及び国民との科学・技術対話を促進する取り組みとして、1) 連携大学院のPh.Dコースの学生やInternship高校生に対する研究指導、2) サンディエゴ在住の日本人高校生を対象とした研究紹介や大学紹介を兼ねた出前授業、3) サンディエゴ在住の日本人小学生に科学の楽しさを伝える科学教室、を行った。

第3項 マヒドン大学

千葉大学は、2000年以降、タイのマヒドン大学と教育・研究交流を活発化させてきた。2000年4月には、千葉大学薬学部とマヒドン大学薬学部・大学院の間で交流協定を締結し、2008年10月に大学間交流協定を締結、2009年3月には千葉大学園芸学研究科とマヒドン大学理学部・大学院のダブルディグリープログラムを開始、2010年3月には国際交流センターを開設、2015年1月には千葉大学薬学部とマヒドン大学薬学部・大学院のダブルディグリープログラムを開始している。

これらを背景に、タイおよび東南アジア諸国連合（ASEAN）地域の研究・教育交流を更に発展させることを目的として、千葉大学はマヒドン大学インターナショナルカレッジ（MUIC）内に「千葉大学バンコク・キャンパス」を開設し、2017年9月19日に開所式を行った。開所式は、千葉大学徳久剛史学長の挨拶で始まり、在タイ日本国大使館の広報文化部長、日本学術振興会バンコク研究連絡センター、千葉銀行バンコク駐在員事務所などからのご来賓の皆様にご挨拶いただいた。またマヒドン大学Banchong Mahaisavariya学長のご挨拶に続き、千葉大学高等教育研究機構の織田雄一教授より、千葉大学とマヒドン大学およびタイ国内協定校との交流の歴史、今後のバンコク・キャンパスの役割や活動について説明を行った。レセプションでは、MUICのPhitaya Charupoonphol学部長による乾杯後、マヒドン大学、MUIC関係者、タイの大学間交流協定校関係者、千葉大学海外同窓生、MUIC短期留学プログラ



写真1-2-6-6
千葉大学バンコク・キャンパスの所在するマヒドン大学インターナショナルカレッジ (MUIC)

ムに参加中の千葉大学学生等、およそ100名が出席し、本学学生による千葉大学キャンパス紹介および小澤弘明副学長の挨拶がなされた。

千葉大学は、上記の諸団体をはじめ、タイと関わりを持つ皆様と現地で協力しつつ、

バンコク・キャンパスを全学的な国際教育の拠点とするとともに、このキャンパスを起点として、タイ及びASEAN地域における主要な研究機関との国際共同研究推進を目指している。また、現地での留学に関する広報や相談、千葉大学タイ校友会の活動および国際共同研究活動にも活用していく予定である。

千葉大学バンコク・キャンパスを拠点の1つとした具体的な活動内容としては、短期留学プログラム（英語初学者のためのBoot Program、演劇を通して社会課題を学ぶActing Global、法政経学部の国際フィールドスタディなど）を毎年開催し、多くの学生がマヒドン大学を訪問している。また本学では共同研究や交換留学等でマヒドン大学の学生を受け入れており、相互の学生交流が活発に進んでいる。また、植物工場を利用したプロジェクトも進めている。学生だけでなく、役員や教職員も相互に訪問を重ね、様々な分野での交流の可能性を模索している。



写真1-2-6-7 千葉大学バンコク・キャンパスの様子

2019年には本学の大学院国際学術研究院の石戸光教授がMUICの客員教授、MUICのDr. Alexander Nanniが本学の特命教授に任命され、両大学の交流のサポート体制がより強固なものとなった。また千葉大学70周年記念シンポジウムにはDr. Alexander Nanniを招へいし、講演を行った。2019年末より顕在化した新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大（コロナ禍）の状況下でも、オンラインを中心とした講義を行っている。また、2022年には、共同でオンライン職員研修も実施された。



写真1-2-6-8
2017年の千葉大学タイキャン
パス開所式にて



写真1-2-6-9
2017年の千葉大学タイキャン
パス開所式にて



写真1-2-6-10
2019年の客員教授・特命教授任命式

上述のコロナ禍により、バンコク・キャンパスにおける活動は2022年の半ば頃まで中断されてしまったが、その後2023年2月からは実渡航による短期留学プログラムを再開し、併せて、全学的に開始された「全員留学」のプログラムも新規で実施するに至った。

上記以外も含めて、千葉大学バンコク・キャンパスにおいては、グローバルキャンパスの1つとして教育・研究・スタッフ間の交流活動を展開しており、タイで活動を行う日本の諸大学間のネットワークへの参画もしている。タイは海外キャンパスの中でも、日本の千葉大学との距離が比較的短く（飛行機で片道6時間ほど）、また時差は2時間のため、コストを抑えた形での実渡航プログラムが実施可能となっているほか、オンラインを活用したプログラムにおいても、学生同士の交流が講義時間内にリアルタイムで行いやすい。さらにタイは観光大国で、ASEANのメンバーでもあり、第二言語としての英語によるコミュニケーションが身近な生活でも感じられる国である。そしてタイにおける工業団地では、日系企業を含めた多くの企業がグローバルな経済活動の一翼を担っている。

まさにダイナミックでグローバルな社会を実感できることが、タイにグローバルキャンパスを設置することの最大のメリットであろう。さらに今後はマヒドン大学インターナショナルカレッジのタイ人学生の皆さん（大変優秀な方々が多く、将来のビジネスパートナーにもなりうる）も交えた混在教育がグローバルキャンパスの一環として展開され、コロナ禍後にはデジタル技術も併用しながら、千葉大学の学生が「グローバル人材」として巣立っていくことを期待したい。